

新編

白隱禪師年譜

凡例

一、『年譜』では当該主人公は一貫して「師」と呼ばれるのが常であるが、本書では原則的には、十五歳で出家するまでは「岩次郎」、そして三十四歳で「白隠」と号するまでは「慧鶴」とした。

一、年譜の本文は現代語訳にし、項目ごとに見出しを付けた。

一、見出しに◎を付けたものは、『草稿』や『年譜』になく、他の資料から追加補足したものである。

一、見出しに?を付けたものは、『草稿』や『年譜』に記述があるものの、誤りと思われるものである。

一、編者の考証や補注は、極力【】内に補ったが、本文に入れたものもある。

一、引用した白隠の著書は、『白隠禪師法語全集』全十四冊、『荊叢毒藥』乾・坤(以上、禅文化研究所刊)、『白隠禅画墨蹟』全三冊(二玄社刊)による。

一、『荊叢毒藥』の書き入れ本に「今津文庫本」とあるのは、花園大学図書館今津文庫本蔵のものをいう。

この書き入れ内容は、右の『荊叢毒藥』乾・坤に翻刻し掲載してあるが、原本影印を花園大学国際禅学研究所のHPの「電子達磨」にも搭載してある。

一、『闡提毒語集』というのは、中津自性寺蔵の『荊叢毒藥』の稿本(一部、白隠の自筆)である。

一、引用した白隠の著作のうち、仮名法語や書簡の引用について、原文のままでは読みにくいので、送り仮名などについては適宜表記をあらためた。

一、資料篇では、上段に『草稿』『東嶺年譜』を、下段に『年譜』の記事を収めた。

一、『草稿』の原本は、ご所蔵者法輪寺の許可をいただいて、花園大学国際禅学研究所のHPの「電子達磨」に搭載したので、ご利用願いたい。

貞享乙丑二年（一六八五）一歳

誕生・父方の杉山家

この年十二月二十五日の夜丑の刻、駿東郡浮島ヶ原の宿に生まれる。幼名は岩次郎。父は杉山氏で、その祖先は勇名を馳せた鈴木氏の一族である。「鈴木三郎重家は主君の源義経が奥州の藤原秀衡の下に逃れることを聞いたが、その行に遅れて追いつけないと知って、一族の七騎とともに伊豆の江梨村に留まった。杉山氏はその末裔である。さらにその先は熊野権現の臣神である。天竺に随行し漢土を歴て再び日域に帰った。世に熊野侍と呼ばれるのがそれである。」

〔以下、東嶺の注〕師が美濃に居たとき、ある家に食事に呼ばれた。そこに盲目の筮法（数）をよくする者がいて、師を占うと、驚いて言った、「あなたは勇夫義人の子孫です。将来、きつと天下の人を走らしめるような人になるでしょう」と。師が笑って真に受けないと、盲人は「あなたが分からなくても、私の占いに間違いはありません」と言う。師がのちに母にこのことを告げると、母は右のような次第を話した。」

【鈴木重家は紀州熊野の藤白鈴木氏の当主である。重家の次男・重次の直系は藤白鈴木氏として続き、この一族からは雑賀党鈴木氏や、江梨鈴木氏などが出た。天竺云々は、『熊野の本地』などに見える説話。天竺の摩訶陀国の善財王の、千人の後のうちの五衰殿の産んだ王子が日本に渡って熊野の神となったというもの。熊野侍は、熊野水軍を率いた熊野別当湛増（武蔵坊弁慶の父）にまつわることを言うのであろう。

慧鶴の母が亡くなったのは、宝永元年（一七〇四）五月二十七日、慧鶴が二十歳のときである。このとき慧

鶴は美濃にいたが、母が亡くなるまでに郷里に帰ったことは、年譜などの記事から類推するにあり得ない。父の俗名は権右衛門である。】

母方の長澤家

母は長澤氏で当家は宿場の長で、代々仏教を奉じる家であった。「原宿に五百年來住まう家であった。富士の大石寺開山日興上人は、もとは天台宗の英傑だったが、岩本の実相寺に住した。日蓮聖人に謁して、日蓮宗に改宗したのである。(日興上人は)鎌倉に往き來する時には必ずこの家に泊まった。日興は後に感謝の印として、日蓮聖人から授けられた炬花燭三器と曼陀羅などを長澤家に授けた。これらは長らく家藏されて来たが、懇請されてすべて大石寺に寄附され、寺宝となった。このために、家に浮沈があつても、大石寺で法会があるときは、招かれて諸檀の上席を与えられ礼遇された。」

【原本の「駅亭の長」は、原宿の場合は「問屋」を指すことになるが、白隠の時代に長澤家が問屋役を務めたことは確認できない。年寄り役のような存在だったのではないか。いずれにしても原宿の有力者の家であった。長澤氏の先祖は、甲州長澤村の出身で、いつの時代かから、愛鷹山麓の根方街道筋の浮島村井出のほとりに土着したのではないかという(秋山寛治『白隠禪師の生縁と修業時代』)。

原本に「一住五百年」とあるのは誇張であろう。日興上人(一二四六～一三三三)は、甲斐国巨摩郡大井莊鰻澤に生まれ、駿州蒲原の四十九院(天台宗)に学んだ。そして、岩本の実相寺(静岡県富士市)を訪れた日蓮聖人に出会って弟子となった。】

母は淳善な人柄で、常に慈悲行を行ない、仏に参り法を聴聞しに行かないところはなかつた。

布施・愛語・利行・同事という四種の菩薩行や八福田という福業を教わらなくとも、その徳沢は考えられないほど、皆に及んでいた。

母、靈夢を見て妊む

ある夜、母の夢に幣ぬぎが見えた。伊勢皇大神の御幣を持った者が伊勢から飛来し、この家の屋根の上に立って、威風凜々として、しばらく御幣を揺らしていた。この夢を見た夜に懐妊した。そのため、母は常に伊勢大神宮を敬うこと、前から定まっていたかのようにであった。誕生の夜、また前と同じ夢を見た。夢から覚めると、身も心も心地よくなっているのを感じ、しばらくして岩次郎が生まれた。

【五十皇は伊勢皇大神のこと。伊勢大神宮のことを五十鈴宮いすずのみやという。】

三男二女

「長澤家には三男二女があり、岩次郎は三男だった。誕生したのは実に、丑の年、丑の月、丑の日、丑の刻であった。予（東嶺円慈）、菅神降生の年を考えるに、人皇五十四代仁明天皇の承和十二年乙丑であり、このために世に丑天神と称され、必ず丑の日にお祭りするのである。そして、白隠禪師は菅神と生まれ年の乙丑を同じくするばかりではなく、さらにまた丑の月、丑の日、丑の刻、そして菅神の祭日である二十五日にお生まれになった。これからすれば、禪師は果たして菅公と宿縁があったというものである。ある時、一人の異人がやって来て白隠老師に謁したことがあった。相見の際に、しばしば

佞臣を退け賢者を推挙して、共に国家を護つていこうではないかと語った。老師は、「そなたは老僧わかしを何者と思っておられるか」と言われた。さらに、国事のことを話し、この異人は大きな声で、「北野天満天神を拝し奉るのみ」と言った。」

【長澤家は、母が夫の権右衛門を迎えたころには、屋敷を二等分して、西側を味噌屋戸右衛門とし、東側を澤瀉屋権右衛門の二軒に分家していたようである。「寛文十一年（二六七二）に原の脇本陣高田市左衛門信貞の作った原宿屋敷割図が松蔭寺に現存している。それには「間口七間奥行廿間、長澤権右衛門豆州江梨出。其隣地に間口七間奥行廿一間、年寄長澤戸右衛門、富士宮社人出」と記入がある」（秋山寛治『白隠禪師の生縁と修業時代』）。長男は法名玄峰古閑。澤瀉屋の当主となり松蔭寺の檀家となった。次男の円心日貞は味噌屋を嗣ぎ、長澤家代々の日蓮宗本広寺（浮島村石川）の檀家となった。】

貞享丙寅三年（二六八六）二歳

【原宿災害・事件簿】

○白隠が生まれたころの松蔭寺の消息を伝える記事が、原土屋家文書「見聞・覚え記」の「前々ノ儀、連々聞書、並びに善悪覚書」に出る。

「（昔、寛永年中のこと）原宿東町の根古屋へ行く道の西角屋敷に文十郎という者がいた。そこに井戸があり、隣家と共同で使っていたが、その使い様についていさかきがあった。両家の女房も加わって互い

に悪口を言い合っているうちに、激昂した文十郎が、十二月二十九日に隣家に押し込み、亭主が餅をのしているところを、袈裟掛けに斬り殺した。文十郎は家に帰ると、腹を十文字にかき斬り、下男に介錯させて果てた。この双方の家にはそれぞれ男子があつたが、兩人ともに出家した。文十郎の息子坊主は学文を遂げ、長老になり、関東で寺を持っていたが、その後、隠居して当宿へ帰つて来て、松蔭寺に居住していた。貞享年中(一六八四〜八八)のことである。ところが、この御坊、乱心になり、我が居宅へたびたび火をつけた。後には本心になって死去した。私(土屋文書の筆者)が十歳ころのことで、その御坊は六十歳ほどに見えた。この御出家の年頃から考えるに、右の喧嘩は寛永年中の頃のことであろう。【土屋家文書の記録者は白隠より八歳年長であるから、松蔭寺にいた乱心御坊の話は、だいたい白隠が生まれたころの話である。三十二歳の条に、「吾が松蔭は叔父大瑞の創建にして、我と土木の労を尽くす。堂庫并べ備え、林木高く秀づるも、皆な他の汗血にあらずと無し」という白隠の父の言葉がある。かなり荒れていた松蔭寺の復興を、長澤権右衛門も手伝つて成し遂げたのである。】

貞享丁卯四年(一六八七)三歳

三歳にしてようやく立つ

三歳になつたが、岩次郎はまだ立つて歩くことができなかつた。これを心に恥じて、ひそかに立つことを練習することしばらく、ある日、家の前でひよいと立つことができ、歡喜にあふれた。

離れたところで見ていた男が「やれ、岩さまが立ったはヤイ」と大きな声で叫んだ。「師の幼名は岩次郎。」師はこのときのことを覚えていて、後に修行仲間にも語った。

貞享戊辰五年、元禄と改元（一六八八）四歳

「小夜の中山」を暗誦する

たいへん記憶力がよく、「小夜の中山」の歌三百余りを暗誦した。そこいらの者たちが菓子を与えて聞かせてくれと言うと、岩次郎はすぐに、それを一字も間違えることなく歌ってやった。みなはその賢さをたたえた。

【「小夜の中山」は未詳。「三百余言」とあるから、街道で歌われた「小夜の中山」を始めとする馬子唄の類であろうか。ちなみに今に伝わる「日坂馬子唄」にはつぎのようがある。「小夜の中山、谷間の桜、上り下りの客が折る。寒や北風、昨日は南風、今日は巽の風が吹く。小夜の中山、夜更けて通りゃ、鹿も友呼ぶ声がする」。】

元禄己巳二年(一六八九) 五歳

世の無常を観ずる

ある日、下女に連れられて浜辺で遊んだ。下女たちは集まって戯れ楽しんでたが、岩次郎だけは、ひとり静かな所に坐つて太平洋を眺めていた。「この海は東は口伊豆江梨の大瀬崎おせざきから、西は遠州塔見の虚空歳くわくさいの峰にまで至っている。」そして、空に雲の行き来して、現われたかと思えば消えてゆくさまを見て、「いかにも変わったものだ」と心に思うのであった。そして世間の無常のさまを観じて、しばしば泣くことがあったが、誰もそのわけを知る者はなかった。もつて生まれた宿知と言うべきであろう。

元禄庚午三年(一六九〇) 六歳

『草稿』も『年譜』もこの年には記事がないが、白隠の『仮名因縁法語』には「休心坊、火難に逢う事」という、次のような物語がある。それによれば「五六歳のころ」という。

「元禄の始めころ、浮島ヶ原に休心坊という捨捨て人がいた。どこの人かは分からない。街道添いに常休庵という荒れ果てた庚申堂があったが、そこに五尺ばかりある、類もなく尊き観音像を運んで来て、そこに住みついていた。元禄三年二月六日の夜のこと、三丁ほど離れたところから火事が起こった。折しも強い西風が吹いていて激しく燃え上がった。老人を背負い子供の手を引いて、逃げまどい泣き叫ぶさまはさ

ながら地獄のありさま。……」。

この火事は常休庵にも迫ったが、休心坊はその中で鉦をたたいて念仏を唱え、その観音像を守った。この火事よりのち、原の人々はこのどの者とも知れぬ休心坊を尊敬するようになったという。

白隠は最後のところに「我等モ五六才ノ時、目ノ辺リ見聞キタル芳躑ナレバ、打チ捨テ難クテ書キ留メ侍リ」と書いている。この休心坊のことは『年譜』および『草稿』では次年の条に出る。

原土屋家文書「見聞・覚え記」のこの年の火事の記録は見えない。おそらくは定休庵が焼けた火事は、二年後の元禄五年のことではないか。そこには「二月二十二日夜七つ時、西町南木戸際より出火」とある。白隠の自伝に見える幼少年期の記述は、そのほとんどが白隠の記憶にもとづくものと思われるが、そこに二三年程度の誤差や暗記の失があってもおかしくはないであろう。」

元禄辛未四年（一六九二）七歳

法華経を覚える

岩次郎は寺に行つて説法を聞くことが好きであった。ある日、『法華経』提婆品の講義を聴聞し、それを覚えて帰り、年寄りたちにそのとおりに話して聞かせたところ、一人の老爺は思わず感涙を流したのだった。

異僧休心坊

このころ、原宿に専修念仏の行者で休心坊という者がいた。どこから来た人か分からない者で、またいずくともなく去つていった男であるが、どことなく気高いところがあり、しばしば不思議な力を示すことがあつた。「うわさによれば、源義経の家来である常陸坊海存であるという。神谷(現富士市)の黄檗宗円成寺に住することおよそ百年。その間に小田原の長興山紹太寺で鉄牛道機に参じて、空を飛ぶ術を現わして追い出されたという。あるいはまた山中村にしばらく住んでいたともいう。好んで尺八を吹き、さながら狂僧のようであつた。浮島ヶ原に来るたびに原宿に留まつた。『本朝高僧伝』に載る常陸の国鹿島、根本寺の残夢和尚(？一五七六)と同人である。東叡山寛永寺の南光坊天海(一五三六？一六四三)は始め残夢に参じ、親しく禅要と占い(定数)と丹田修養の秘訣を受けたので、百六十余歳までも長生きをした。この海存はもともとは奥州にいたのだが、仙人に逢つてその術を得た。その後、藤原秀衡の計らいによつて、(頼朝の軍勢から逃れて)主君の義経に付き従ひ、武蔵坊弁慶、亀井重清、片岡常春、伊勢義盛、駿河次郎ら、一行六人は蝦夷に落ち延び、ここで国を治め、北狄を伏した。やがて義経は中国大陸に渡つて王に封ぜられた。後に明を亡ぼして清朝を開いたのはその末裔である。しかし海存だけは大陸には渡らず本国に止まり、常に主君の義経を慕ひ、山野に棲遅していたが、しばしば不思議な事跡を残している。この義経の始末記はさる隠士が語つたものであり、そのことを記したものを『新義経記』という。その事跡はおおかた信ずるに堪えるものである。」

休心坊の教え

岩次郎の父は常にこの休心坊を自宅に招いて供養していた。休心坊は長澤家に来ると、いつも岩次郎を呼んで自分のそばに坐らせ、他の者の下座には坐らせなかった。そして、背中をなでながら、「よい子じゃ、この子には不思議な相があるから、きつと世のためになる人となるだろう」と言うのだった。また、「お釈迦さまは雪山で六年、達磨大師は少林寺で九年も苦行をなされた。おまえもこのようにしなさい」と言った。そして「時ぎり場ぎり（即今当処、つねに「今ここ」を意識し、余念を交えてはならない）」ということを教えた。

ある時、三つの要訣を教えて言った、「一つ、食べ残しの汁には湯を加えてこれを飲むこと。二つ、小便をするときにはしゃがんですること、決して立ってしてはならない。三つ、北方を尊んで、便ならびに（寝るときも）脚を向けてはならない。この三つを守れば、長生きすることができる」と。

禅師は一生涯、病気するときでも、この三訣を犯すことはなかった。その靈妙なる効果によって、このように長生きされたのである。

【『草稿』に「地極限、場極切」、また『年譜』に「地限り場限り」というのは不審である、これでは同じこと同反復となる。あるいは「時ぎり場ぎり」ではないか。禅語でいえば「即今当処」、つねに「今ここ」を意識すること。「いま」という時間だけ、「ここ」という場所だけ。別の言葉でいえば前後際断である。】

◎ケンベル、原宿を通る

二月三十日、ケンベルが、オランダ商館館長と共に徳川綱吉に拝謁した。江戸に向かう一行が、江尻から三島まで移動したのは三月十日(日本暦では二月十五日ころ)である。

『江戸参府旅行日記』(平凡社・東洋文庫、斎藤信訳)には左のようにある。

「元吉原という貧弱な村は、約三〇〇戸から成り、吉原から半里の所にある。われわれはそこで昼食をとったが、子供たちが、群をなして馬や駕籠に近づいて来て……面白いとんぼ返りをしながら、輪を描いて駆け回り、施し物をもらおうとしたので、われわれは子供たちに小銭をたくさん投げてやった。彼らが砂の中でぶつかり合つて倒れ、あわてて銭をつかもうとする様子は大へん面白かった。……子供たちは旅行者が幾らかでも小銭を投げてやるまで、時には半里もついて来る」。

ケンベルが長崎への帰途、このあたりを通つたのは四月八日(日本暦では三月中旬)である。沼津を「日の昇る三時間前に」出発した一行は原へ向かう、その途中の記事にいう「伊勢参りの若い人たちが野宿しているのに出会つたが、これとは違って、なんまんだあを唱える念仏僧は、まだ早暁だというのに、もう路傍に立つて小さな鉦を鳴らし布施を乞い求めている。沼津から道は西北に向かい、約一里の間、海岸に並ぶ幾つかの小さいさびれた村を縫つて通じていた。この辺では少年たちが目のまわるようにとんぼ返りをやってみせたので、われわれは幾らかの祝儀ははずむ気になった」。